

# ルネサンス期における友人関係と〈自己〉の演出 —マキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡(1513-1515) )

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-04-17<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 石黒, 盛久, Ishiguro, Morihisa<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24517/00053897">https://doi.org/10.24517/00053897</a>                                      |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ルネサンス期における友人関係と〈自己〉の演出

—マキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡(1513-1515)<sup>1</sup>

石 黒 盛 久

## — I —

『君主論』や『デイスコルスィ』の著者 N・マキアヴェッリがイタリア・ルネサンス期を代表する政治思想家であることは、いまさらこれを喋々するまでもあるまい。他方その『フィレンツェ史』が畏友グイッチャルディーニの『イタリア史』と並び、ルネサンス期歴史叙述を代表するものと評されてきたことも、よく知られるところである。他方これらの政治・歴史的著作と相関する著作『戦争の技法』は、ナポレオンやクラウゼヴィッツなど近代の偉大な将帥たちから高く評価され、近代軍事論の濫觴と目されてきた。また傑作『マンドラゴラ』の執筆ゆえに彼は、イタリア文学史上屈指の喜劇作家とも位置づけられている。「歴史家、喜劇作家、悲劇作家」(historico, comico e tragico)という自署にも窺えるように<sup>2</sup>、政治学、歴史学、軍事学、文学などあまたの側面に繰り上げられたその才能は、彼をしてその友レオナルド・ダ・ヴィンチと並ぶ、ルネサンスの万能人の一人と数えさせる程のものである。だがこうしたその著作により彼の名が今日に残されるものとなったとはいえ、多くの研究者の評によれば著作活動は彼にとり、「不可能となった政治行動の一時的なそして不十分な代用品」であるに過ぎなかった。マキアヴェッリは「文筆活動に満足するよりも、メディ

<sup>1</sup> 本稿におけるマキアヴェッリー-ヴェットーリ書簡の引用にあたっては N. Machiavelli, *Lettere a Francesco Vettori e a Francesco Guicciardini*, Rizzoli, Milano, 1989 を参看した。訳文は全て N・マキアヴェッリ (武田好・藤沢道郎・石黒盛久・服部文彦・松本典昭・和栗珠里訳) 『マキアヴェッリ全集 6』「書簡」に拠った。

<sup>2</sup> N・マキアヴェッリ、1525年10月21日付 F・グイッチャルディーニ宛書簡の署名。

チ家の人々のために「石を転がす」方を好んだ」のだ<sup>3</sup>。

そのような彼の政治的実践活動の記録として我々は、数千通に達するその使節書簡や政務書簡の束を有している。だが近年それに対し次第に関心が向けられてきたとはいえ、こうした使節書簡や政務書簡の分析には、未だ考察のメスはほとんど入れられていない<sup>4</sup>。だがこの膨大な史料群にいきなり取り組むためには、筆者にその準備が欠けていることを告白しなければならない。他方彼の書き残したもののうち、使節書簡・政務書簡に比べ多少の先行研究があるとはいえ、やはりこれまで十分な取り組みがなされてこなかった素材として、その私的書簡がある。後述のようにこれらの書簡は公務上の書簡に比し、残存数が限定されているため、分量面から見ても研究材料として取り上げやすいことは事実である。その上こうした私的書簡はその多くが、16世紀初頭というイタリア・ルネサンス政治社会の転換期に、ヴェットーリやグイッチャルディーニの如き彼の生活に深く影を落とす人士に宛てられたものであり、彼の思想の展開過程の射程の内にこれを組み込むことも比較的容易である。またこの私的書簡の幾つかは、その様式において公的書簡に準じた様式に沿って執筆されており<sup>5</sup>、従ってこれらを読むことは、将来に研究の範囲を公的書簡にまで拡張するにあっても格好の練習作業となる。

とはいえ書簡研究に取り組むにつき従来、幾つかの難点が指摘されてきたことも否定できない。第一に著作と異なりこうした著述の多くが、閉ざされた交友関係を前提とした率爾の著述であったため、その前提とする諸文脈に関する説明が大胆に省略されており、またかかる関係に関与する者の相互間においてのみ了解可能な、隠語や暗示に充ち満ちているため、後世の部外者のそれらに

<sup>3</sup> F. Bausi, *Machiavelli*, Salerno, Roma, 2005, p.342. 同じくバウシはマキアヴェッリ自身の言葉を転用し、些かの皮肉を込めてこう記している。「彼が文人となりおおせ、『君主論』を執筆しようとするためには、ニコロ・マキアヴェッリは内閣第二官房から追放され、サンタンドレアの山荘に隠遁することが不可欠であった」と(*Ibid.*, p.341)。

<sup>4</sup> マキアヴェッリの使節書簡・政務書簡に取り組んだ先駆的力作として、A. Guidi, *Un segretario militante-Politica, diplomazia e armi nel Cancelliere Machivelli*, il Mulino, Bologna, 2009 を挙げておきたい。

<sup>5</sup> J.-J. Marchand, "I 'giochi' di travestimento del Machiavelli diplomatico tra codice ufficiale e codice familiare (frammenti inediti in lettere di legazioni)", in *Passare il tempo. La letteratura del gioco e dell'intrattenimento dal XII al XVI secolo*, Salerno, Roma, p.634.

対する接近を著しく困難にしている<sup>6</sup>。また多くの場合、主要著作における完成された主張からの逆算を通じてこれを考察しようとするため、書簡については専ら、主要著作中の主張の補強材料を書簡中に見いだすという、原因と結果を転倒するような言及が少なくなかった<sup>7</sup>。本稿はマキアヴェッリの書簡を、ルネサンス期の書簡文化の系譜を介して考察することにより、その思想的意義を主要著作の記述から逆算によってではなく、知人たちとの書簡による情報や思想の交換を通じ、彼の思考が次第に成熟し結晶していく過程を追体験することにより、彼の思考の考察において排除されてきた揺らぎを導入することを介し、主要著作の内容自体に新たな光を投げかけようとする作業の第一歩である。

マキアヴェッリのそれに限らず、書簡の往復を通じて復元される人間関係のネットワークは、社会の法制度的機能が依然脆弱であったルネサンス社会を規定する、基本的枠組みであった。それは垂直方向に伸びる庇護関係と水平的に広がる友人関係とを二つの軸とするが、学問趣味や信心を媒介にこの両者は交錯し階層間の接触を促進することにより、社会をより立体的・有機的なものへと再編成していた<sup>8</sup>。こうした庇護関係や友人関係においては、道徳規範として直接的には相手に対する無私の献身が要求される一方、長期的期待として様々の便宜の授受による、利益の獲得が期待されていたことも否定し得ない<sup>9</sup>。即ち当時の市民たちは、表見的な無私と深層レベルでの打算のあわいにおいて、時には明確な意識を以て、時には無意識的に他者に対する自己の行動を規定あるいは演出していたのである。このような観点からマキアヴェッリ書簡の分析に着手するにあたり、筆者が素材としたのはマキアヴェッリとその友ヴェットーリの往復書簡であるが、今回は視点を明確にするためにあえてマキアヴェ

<sup>6</sup> Bausi, op.cit., p.325.

<sup>7</sup> J. Najemy, *Between Friends-Discourses of Power and Desire in the Machiavelli-Vettori Letters of 1513-1515*, Princeton University Press, Princeton, 1993, p.5.

<sup>8</sup> ルネサンス期フィレンツェの友人関係については例えば K.J.P. Lowe, "Towards an Understanding of Goro Gheri's Views on amicizia in Early Sixteenth-Century Medicean Florence" in *Florence and Italy: Renaissance Studies in Honour of Nicolai Rubinstein*, Westfield College, 1988, pp.91-105 あるいは徳橋曜「15世紀フィレンツェ社会における「友人関係」」『イタリア学会誌』44号、1994年、153頁-176頁。

<sup>9</sup> Najemy, op.cit., pp.21-23. E. W. Kent, *Bartolommeo Cederni and His Friends: Letter to an Obscure Florentine*, Olschki, Florence, 1991, pp.10-12.

ッリのヴェットーリ宛書簡に、考察の対象を限定することとした。もちろんネジェミーも指摘するように、本来相関的に展開するはずの往復書簡研究においてヴェットーリの書簡の分析の欠落は、マキアヴェッリの書簡自体の考察に看過すべからざる歪みを生じさせることは承知している。だが往復書簡をそれに参与する両者双方の観点から複合的に考察しようとすることは、言ってみれば二次方程式を解こうとする試みであり、いっそう繊細な分析技術を必要とする難問である。そこで今回はまず、その前提として対象を、1513年から1515年の間にマキアヴェッリの側からヴェットーリに向け宛てられた22通の書簡に限定することにより、いわば一次方程式につきいったんの解答を入手するとともに、それを以って次なる二次方程式への取り組みの基礎固めとしたい。マキアヴェッリとヴェットーリの間には、前者の才能に対する後者の尊敬ゆえの友情が育まれた一方、後者の身分的・資産的優越という歴然たる格差に加え、両者間の属する政治的党派の相違も存在した。こうした相反する与件の中でマキアヴェッリが、この友人関係<sup>アミキツイア</sup>を成立させるため、如何なる自己演出の戦略を実践したかを探求してみたい。

## — II —

マキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡の考察に進むに先立ち、マキアヴェッリの私的書簡の史料としての残存状況に目を向けておこう。マキアヴェッリの私的書簡は一面において同時代の人文主義者の書簡と共通する側面を有しているが、他方それとは明らかに異なる性格をも備えている<sup>10</sup>。まず確認すべき点は、その鼻祖ペトラルカ以来人文主義者の書簡が、将来の公刊を想定したある種の文芸作品と意識されていたのに対し、マキアヴェッリが自身の私的書簡の公刊を全く念頭に置いていなかった点であろう<sup>11</sup>。ペトラルカはもちろん、彼の衣鉢を受け継いだサルターティもまた、早くから書簡集の刊行を志し、自身が知人

<sup>10</sup> Bausi, op.cit., p.323.

<sup>11</sup> M. L. Doglio, “《varietà》 e scrittura epistolare: le lettere del Machiavelli” in *L'arte delle lettere-idea e pratica della scrittura epistolare tra Quattro e seicento*, Il Muliano, Bologna, 2000, p.77. Najemy, op.cit., p.13.

に宛てた書簡の写しやそれに対する返書を丁寧に保管したのみならず、一冊の書をなすに当たり公表に差し支えある箇所はもちろん、集成全体を貫く基本理念に背反するような箇所についても削除・集成・添加と言った編集作業を施している<sup>12</sup>。

他方マキアヴェッリの書簡がその集成を予定されていなかったことは、「なぜならその記録簿が残っていないから」という、その孫ジュリアーノ・リッチの言からも窺える<sup>13</sup>。換言すればその書簡は、片っ端から読み捨てられる運命に置かれていた。その結果今日我々の手に残された彼の私的書簡は、僅か 80 点余りであるに過ぎない。これに対しマキアヴェッリ宛書簡として、今日に伝えられるものは 250 通程度である<sup>14</sup>。もちろん実際にはこれより遙かに多くの私的書簡が、彼とその知人たちの間に授受されていたであろう。このことは、内閣官房の同僚たちに宛てた失われた彼の書簡について語る、アゴスティーノ・ヴェスプッチやバルトロメオ・ルフィーニの発言から容易に知ることができる<sup>15</sup>。送信 80 余通、受信 250 余通の私的書簡の伝来の功は偏に、時勢に逆らい検閲版マキアヴェッリ著作集の刊行を企図した、前記ジュリアーノ・リッチの筆写によるものであるが、逆にそのためにリッチが破棄した書簡の数もまた、少なからぬものであったに違いない。そのように破棄された書簡には、露骨な性的表現が為されたものに加え、カトリック教会や宗教に対する侮蔑的見解や、反道徳的主張と目される見解を記したものが少なくなかった事だろう<sup>16</sup>。

今に伝わる 80 余通の彼の手になる私的書簡も、その生涯の各時期に均等に執筆されている訳ではない。彼の人生の初期とも言える 1497 年から 1512 年の 15 年間につき伝えられる書簡は、わずか 20 通しかない<sup>17</sup>。先に述べたように後年に破棄されたこの時期の書簡も少なくないと考えられるが、そもそも内閣第二官房長としての激務自体が、彼に必要以上の私的書簡の執筆を許さなかったこ

<sup>12</sup> 全体の体裁を整えるため、実際には全く発送されなかった架空の書簡を挿入することすら行われている (Ibid. p.25-26, p.35)。

<sup>13</sup> Bausi, op.cit., p.324. Najemy, op.cit., pp.12-13.

<sup>14</sup> Bausi, op.cit., p.323. Doglio, op.cit., p.76.

<sup>15</sup> Bausi, op.cit., pp.324-325. Marchand, op.cit., pp.634-638.

<sup>16</sup> Bausi, op.cit., p.324. Najemy, op.cit., pp.12-13.

<sup>17</sup> Bausi, op.cit., p.324.

とも考慮に入れなければならない<sup>18</sup>。とはいえこの時期に属する僅か 20 通の私的書簡の中には、そのサヴォナローラ批判により知られる 1498 年 3 月 9 日のリッカルド・ベッキ宛書簡や、後年の喜劇『マンドラーゴラ』の世界を思わせる、自身の性的冒険について語る、1509 年 12 月 8 日付のルイジ・グイッチャルディーニ宛書簡など、彼の書簡全体を論じる際に逸すべからざるものも少なくない。

だがいっそう注目すべきは、今回取り上げる 1512 年から 1515 年にかけての時期、フランチェスコ・ヴェットーリとの間に交わされた 22 通の書簡である<sup>19</sup>。これは今日に残るマキアヴェッリの私的書簡の総数を 83 通とした場合、その 33% に達する。この全体との比較における突出した残存状況を踏まえて、当該時期の往復書簡だけは、マキアヴェッリにより一つにまとめて保管されていたのではないかとする説も強い<sup>20</sup>。後述の如く、メディチ政権復興により失脚を余儀なくされたこの時期、彼はヴェットーリを介してしきりに獵官活動を試みており、従って彼の書く手紙の多くが単にヴェットーリに宛てられたものであるに留まらず、フィレンツェの駐ローマ大使たる彼を通じ、当時ローマなるメディチ政権中枢の高位者にそれが回覧されることを念頭に置くものであったとしても不思議ではない。ヴェットーリの側から言えば、その才を認め好意を抱く友人のためとは言え、前政権に連なる政治犯の烙印を押された人物に宛てた私信が、多数の目に不用意に晒されることを警戒していたことが、こうした行為に関するマキアヴェッリ自身の記述からも看取できる<sup>21</sup>。

<sup>18</sup> Ibid., p.324.

<sup>19</sup> N. Machiavelli (a cura di G. Inglese), *Lettere a Francesco Vettori e a Francesco Guicciardini*, Rizzoli, Milano, 1989 による。同書においてこの時期のヴェットーリからの返書は 18 通を数える。

<sup>20</sup> Najemy, op.cit., p.13.

<sup>21</sup> Ibid., pp.13-14. 「唯一思い当たるのは、私が貴兄の手紙の良き管理人ではないと誰かが貴兄に密告しそれで私に手紙を書くのを控えておられるのではないかと言うことでしたが、フィリップとパオロ以外に私の許しを得て貴兄の手紙を読んだものはいないのです」(1513 年 12 月 10 日ヴェットーリ宛書簡)。

教皇レオ 10 世とその弟ジュリアーノ、そしてその甥小ロレンツォと、三者に担われるメディチ権力の内部の葛藤において、ヴェットーリ自身の立場が決して盤石なものでなかったこともまた、こうした懸念の原因であろう(R. Devonshire Jones, *Francesco Vettori- Florentine Citizen and Medici Servant*, The Athlone Press of University of London, London, 1972, p.75, pp.102-105)。

これと並んで大きな固まりをなしているのが、マキアヴェッリがカルピ滞在中、近隣モデナに赴任していたグイッチャルディーニと交わした総計 6 通の書簡および、イタリア・ルネサンスの終焉を告げる〈ローマ略奪〉前夜の風雲急を告げる情勢下、同じくグイッチャルディーニと交わした、両者合わせて 28 通の書簡であるが、これらについてはまた稿を改めて論じることとなる。

### — III —

続いて本節ではマキアヴェッリの私的書簡を読み解く手がかりとして、ルネサンス期における書簡一般に関する文化史的背景を概観しておきたい。

15 世紀から 16 世紀初頭に及ぶこの時期の書簡は、大略以下の三つの種類に分類することができる。即ち俗語を用いた日用的書簡と、主にラテン語により記される公的書簡、そして同じくラテン語により執筆されながら、私人相互の交際に用いられるいわゆる人文主義的書簡である。日用的書簡の代表例としてまず思い浮かべられるのが、15 世紀プラトーの商人フランチェスコ・ダティーニが一生にわたって書き残した、14000 通に達する書簡群、いわゆるダティーニ文書であろう。その大半は商売上のさまざまな指示や情報を伝達する商用書簡であるが、商売外の依頼や請願に関するもの、あるいは家族・親族間の安否の確認や動静の報告といった、より私的な生活に含まれる書簡も少なくない。その文体は簡潔素朴であり、こうした日用書簡にこそ、トスカナ諸都市の中世俗語文化の典型例を見ることができるだろう。マキアヴェッリの私的書簡であっても、当時コンスタンティノーブルで商売を営んでいた甥ジョバンニ・ヴェルナッチ宛の書簡などは、こうした範疇に属するものである。

公的書簡とは、一定の特殊な書式に則って専門技能者により作成される文書に他ならない。フィレンツェにおいてこうした書簡生産の基盤となったのが、カンチエリア内閣官房に他ならない<sup>22</sup>。通常こうした外交書簡や行政書簡としては、フィレン

<sup>22</sup> Najemy, op.cit., pp.23-24. フィレンツェ政府内閣官房における人文主義的書記官達の活動については、E・ガレン（清水純一・斎藤泰弘訳）「コルッチョ・サルターティからバルトロメオ・スカラに至るフィレンツェ共和国書記官長」『イタリア・ルネサンスにおける市民生



ツェであれば第一官房において作成されたラテン語書簡に注目が集まるが、マキアヴェッリの手になる報告書のように、第二官房において作成される俗語書簡もまた、一定の書式に基づく書簡として公的書簡の一端を担っている。実はマキアヴェッリのヴェットーリ宛私的書簡のうち少なからぬ数が、あたかも官房長の官職の喪失を埋め合わせようとするかのように、在職中の公的書簡に近似した文体を踏まえて、国際情勢を論じている。

これに対し人文主義的書簡は、人文主義者を書き手としたラテン語書簡であることは先に言及した通りである。その主な素材は日用的書簡同様、友人知人間の動向の報告であるが、着目すべきは知識人たる彼らの書簡がこうした動向の報告を越え、古典作家の著作を自在に引照しつつ、倫理的そして時には社会的感懐の表白に及んでいる点であろう。このような水準に達した書簡は、時に単なる書簡であることを超え、思想的な小論文と称し得るものとなっている<sup>23</sup>。その結果として特定のある個人に宛てられることを前提とせぬにもかかわらず、意図的に書簡の体裁を備えるが如き著作もまた、出現するに至っている。人文主義的書簡が多くの場合その公刊を前提に、当初からある種の虚構性を有したり、あるいはその集成に当たって再度の推敲を加えられたりしたことは先に論じた処である<sup>24</sup>。そして書簡とその集成のこのような公共性を契機とし、書簡の筆者はその叙述を通じて本来の自分とは異なる、見せたい自分を演出する術を学んでいった。もっと言えば見せたい自分が外在するのではない、公共性をはらんだ人文主義的書簡の執筆の過程において、筆者は世間に演出したい個我を自覚し、これをいやが上にも磨き上げていくのである<sup>25</sup>。

活と科学・魔術』岩波書店、1975年、3頁-39頁を見よ。

<sup>23</sup> Najemy, op.cit., pp.56-57.

<sup>24</sup> Ibid, pp.28-29. ベトラルカは、その目的や対象を異にする書簡集所載の書簡が、特定の具体的人物に宛てられたオリジナル書簡に対して、修正版との差異を加えたものであることを、はっきりと語っている。

<sup>25</sup> こうした自己演出と個性の創出の連関についてトレクスラーは、「感情と社会、内面性と外面性、内実と形式等々は互いに弁証法的関係を作りあげている。形式がなければ如何なる誠実さもないし、誠実さがなければ如何なる形式もあり得ない」と指摘している(R. C. Trexler, *Public Life in Renaissance Florence*, Cornell University Press, Ithaca- London, 1980, p.132)。「手紙というものは単に私が言ったりやったりしたことのみならず、私の懸念や私の省察をも盛り込んだものである、それはさながら私の今一人の自分という者に対して、ものを書き送って

人文主義的往復書簡はその執筆を通じてもたらされる人生観や倫理観の深化や、それと関連する二人の関与者相互の個性の自覚から、時に親交書簡と称されることもある。そしてこの「親交書簡」と言う名称は古代ローマの文人キケロの、そしてまたキケロを師表と仰いだルネサンス人文主義の祖ペトラルカの、書簡集の名にその起源を有している<sup>26</sup>。そこから理解されるとおり、ルネサンス期の人文主義的書簡＝親交書簡は、これら二人の偉大な作家がその親交書簡において提示した原則を、その準拠すべき典範とした<sup>27</sup>。それは要約すれば二つの点に絞られる。即ちペトラルカによれば第一に、書簡とはその場に現前せぬ友に対する語りかけであり、しかるが故に実際の会話同様に、なるべく「平明な日常的かつ親近感ある文体」で、「口の端に上ったことの全てを、何くれと無く書き記す」べきであること。第二に書簡は自己完結する書き物ではなく、常に相手有するものであるから、「君が誰に向けて書こうとしているのか、そしてまた君が書くことを企図している書き物を彼が読もうとするとき、この人物がどんな気持ちでいるのか」を考えねばならない。換言すれば受取人の多種多様性を踏まえ、相手により内容やスタイルを変化させることが必要であり、その結果として書簡というものの自体が多様性を有するものでなければならないということである。これを受けペトラルカは、次のようにも言っている。「たった一種の食品では様々の胃袋を満足させないのみならず、一つの胃袋をも満足させないことはもちろんのことである。それゆえ一つの魂を常に変わらず、一種類の変わらぬ文体によって養うことは不可能」である<sup>28</sup>。ここに窺えるとおおり、

---

いるかのようにである」というボッジョ・ブラッチョリーニの書簡も、こうした自我形成の過程を示唆している(Najemy, *op.cit.*, pp.32-33)。またこうした議論の文学史的総括としてS・グリーンブラッド(高田茂樹訳)『ルネサンスの自成型』みすず書房、1992年、とりわけ2頁(「作るという行為ないしは過程、ある特定の様相または外見、際だった様式や型などを表すものとしては、*fashion* という言葉はずっと以前から使われていたが、それが自己の形成を示す一つの方法として広く用いられるようになったのは、16世紀になってからである」)、39頁(「自己に役を振りあてそれを演じること、芝居の舞台に押し出された登場人物として、状況に応じて不断に自己を刷新しつつ、そして、常に自己の非現実・非実在性を自覚しつつ、自らの生を生きること」)、21頁等を参照。

<sup>26</sup> Najemy, *op.cit.*, p.25.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.26.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.28.

書簡の多彩さは単にそれを受け取る相手の多彩さの表象であるのみならず、そうした外部の多彩さに応じて、自身を千変万化させ得る書き手の生そのものが秘める多彩さの顕れともなる<sup>29</sup>。

こうした書簡観とマキアヴェッリの文章観のつながりを我々は、その著述の随所に見いだすことができよう。例えば被献呈者小ロレンツォ・デ・メディチに宛てられた手紙の一種たる『君主論』の献辞において彼は、この著につき「あのもったいぶった文末の韻律や、大げさな美辞麗句、そのほか比喻やうわべの飾りなどをちりばめて、飾ることをいたしませんでした」と語っているが、この事こそは彼がこの著を当時の他の多くの小論文同様、書簡に準じた、明快平易な様式によって執筆することの宣言と取れなくも無かろう<sup>30</sup>。事実この著において彼がその命題を提示する際の文主語として、紙上の具体的な対話者を想定させる「御身」(voi)を多用していることは注目に値する。あるいは名高いその1513年12月10日の書簡に記された、サンタンドレアの山荘の書齋における、書物を介した夜な夜な四時間に及ぶ、不在の友としての古人との語らいもまた、こうした親交書簡の規範の見地から見れば、新たな意味を発し始めるのではないだろうか<sup>31</sup>。

このように人文主義的親交書簡が一つの文学様式として成立してくるに並び、当然ながらその範型化が進行してくる。「不在の友への語りかけ」とか「読み手に応じた多様性を備えよ」といった原則の指示自体が、こうした典範化の第一歩であるが、こうした書簡が広く世に普及するにつれ、本格的な手引き書が数多く出版されるようになる。人文主義書簡の執筆マニュアルの嚆矢は、ロレ

<sup>29</sup> 手紙は「可塑的であるべきであり」、「ポリープがそれを取り巻く条件に適合するように、手紙もまたそれ自体あらゆる種類の状況と主題に適合しなければならない(Ibid., pp.55-56.)。

<sup>30</sup> 「作品につきましては、私は、多くの著者が各自の論題を叙述するときによく用いる、あのもったいぶった文末の韻律や、大げさな美辞麗句、そのほか比喻やうわべの飾りなどをちりばめて、飾ることを致しませんでした。と申しますのも、この作品がただ題材の新味と主題の重要性と言うことで受け入れられることを望みましても、そういった他の特徴でありがたがられることを望まないからであります」(『君主論』献辞)。

<sup>31</sup> 「古の人々が集う古の宮廷に入ります…私は臆することなく彼らと語り合い、彼らがとった行動について理由を尋ねます。すると彼らは誠心誠意応えてくれます」(1513年12月10日ヴェットーリ宛書簡)。

ンツォ・ヴァッラの『書簡作成の手引き』である<sup>32</sup>。この書においてヴァッラは、文章において用いられるべき文体を真行草の三体に分ち、書簡の執筆については行の文体を用いることが適切であることを説くと共に、挨拶—導入—叙述—請願—結句という五部の構成を備えるべきことを提示したが、これらは人文主義書簡作成時の鉄則として、以後長く伝承されていくこととなる<sup>33</sup>。ヴァラの著作の盛行を承けて、一五世紀後半のイタリアで更にダーティの『エレガンティオラス』、ネグリの『書簡執筆法』と言った作品が次々に世に出たが、それらの著作において特徴的なのは、手紙の書式を用途や状況に応じて分類し、それに関する模範的事例を掲載するという、今日まで書肆に氾濫する「手紙の書き方」的書物の先駆となったことであろう<sup>34</sup>。

手紙作成のマニュアル本の盛行はアルプス以北においても、シャルル・メニケンの『書簡典範』をはじめ多くの類似的作品を生産したが、書簡作成マニュアルの頂点というべきものこそ、エラスムスの『書簡作成論』に他ならない。そこでエラスムスはポリツィアーノの影響を踏まえ<sup>35</sup>、キケロやペトラルカの所説を機械的に受容する先行著作を批判しつつ、良き書簡は単に口語的の平明さに終始してはならず、単調さを回避するため時に節度をもった技巧を凝らすべきことを主張した。また書簡の文体や内容が、前述の如く常に相手の存在を前提とするものである以上、相手との関係如何によっては、必ずしも文意平明であることに拘泥しないことを必要とする場合もあろう<sup>36</sup>。エラスムス自身この機微

<sup>32</sup> Najemy, op.cit., p.42.

<sup>33</sup> Ibid., pp.42-43.

<sup>34</sup> Ibid., p.43.

<sup>35</sup> Ibid., p.52. A. Poliziano (a cura di L. C. Martinelli), *Commento inedito alle selve di Stazio*, Sansoni, Firenze, 1978, p.18. 「というのも手紙は即興的な発話を模した対話がそうするのに比して、いっそう注意深い技巧を要求するからに他ならない……手紙とは書き記されたものであり、ある意味において贈り物として送り届けられたものである。それゆえ手紙はその議論を〔対話に比し〕妨害なく行うことができる」(Maiore enim quadam concinnatione epistola indigent quam dialogus: imitator enim hic extemporaliter loquentem..., at epistola scribitur et quodammodo munus mittitur, unde etiam impune epistola argumentatur)。

<sup>36</sup> Najemy, op.cit., p.55. D. Erasmus (J-C. Margolin ed.), “De conscribendis epistolis”, in *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterdomi*, I-2, North-Holland Publishing Company, 1971, p.18. 「曖昧さは常に有害なもので従ってまた常に避けるべきものなのではあるが、手紙の執筆だけは—曖昧さが理解不能なものとならない限り—それが許容される文芸ジャンルであると信じたように思う。先人キケロに基づき我々はギリシア語とラテン語を混ぜ合わせることを許容されるし、曖昧

を「髪を整える焼きごてを要求する訳ではない—だが見苦しいものとならないよう心を配らなければならない」と語っている<sup>37</sup>。こうした書簡における技巧の一つが、お互いの人文主義者としての素養を試す一種の遊戯としての、謎かけや暗示あるいは引用や比喩の効果的利用であった。ある種の闘争的ゲームの要素を孕んだかかる文章遊戯のことをエラスムスは、〈小競り合い〉(velitor)と称している。こうした〈小競り合い〉はマキアヴェッリとヴェットーリ、あるいはグイッチャルディーニとの往復書簡の随所に見られるが<sup>38</sup>、本稿第一節末尾に示したような屈折した相互関係にある二人の友の対話としてのこれら往復書簡を理解するために我々は、かような〈小競り合い〉を通じ垣間見られる、[時には互いにとって代わろうとするような] 対抗関係や競争関係、そしてまた相互の攻撃といった友人関係を構築する事柄の複雑な諸段階を理解しなければならない<sup>39</sup>のである。

#### — IV —

さてここまで長々と紹介してきたような情報を利用しつつ、実際にマキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡を考察したい。とはいえ 1513 年から 1515 年にわたり彼がヴェットーリに送付した書簡だけでも 22 通を数える。紙幅の関係もあり、本稿においては中でも一つ連鎖を形作っている、最初期の 4 通の書簡(1513

なほのめかしや不明瞭さ、隠された含意やことわざ、謎々そして唐突な終わり方と言ったあれこれの活用が許される) (obscuris allusionibus uti. amphibologies, significationibus, paroemiis, aenigmatibus, clausulis de repente praecisis)。

<sup>37</sup> Ibid., pp.20-21.

<sup>38</sup> 例えば 1514 年 2 月 4 日付(「鎖で馬車につながれているユピテルの姿」[ペトラルカ『藍の勝利』]や「威厳ト恋ハ両立シ難ク、同ジ住所ニ留マレヌ」[オヴィディウス『変身物語』])や 1514 年 2 月 15 日付(「ソノ話ハ天ノ下遍ク知ラレトコロトナリシ」[オヴィディウス『恋愛指南』])のヴェットーリ宛書簡における古典の一連の引用。くだけた戯れ言のさなかに、相手の教養の度合いを測るかのよう、さりげなく挿入されたこうした引用は正に、文人同士の知をめぐる遊戯的〈小競り合い〉と言うに相応しいものである。最も印象的なのは自身の鬱懐を言外に託した、1513 年 4 月 16 日付書簡中のペトラルカの詩の一節であろう(「とはいへ時には笑い歌いもする／それだけが我が嘆きの悲しみを／ぶちまける唯一の道なのだ」(ペトラルカ『カンツォニエーレ』))。

<sup>39</sup> Najemy, op.cit., p.55.

年3月13日-1513年4月16日)に焦点を当てようとする。なぜならこれ以前とこれ以後では同じ私的書簡とはいふ、叙述の様式が大きく転換しているからである。だがこの4通のヴェットーリ宛書簡の分析の出発点として、マキアヴェッリとフランチェスコ・ヴェットーリの人間関係につき、若干の伝記的情報を追加しておこう。

記録に残る限り、マキアヴェッリとヴェットーリとの最初の接触は1507年のことである。イタリア侵攻が取り沙汰される皇帝マクシミリアン1世の宮廷に大使を派遣するにあたり、フィレンツェ政府主席ソデリーニは当初マキアヴェッリを指名した。しかしこの人事案は、彼の家格の低さゆえ都市貴族層の反感的となり、結局貴族層に属するヴェットーリの起用が決定された<sup>40</sup>。ところがその数ヶ月後、今度はソデリーニの画策が奏功しマキアヴェッリがヴェットーリを補佐する参事官として、コンスタンツの皇帝宮廷へと送り込まれることとなったのである。残された報告書は確かに、この時期のマキアヴェッリとヴェットーリの緊密な協力を示している。とはいえ彼らは同じ一つの官職をめぐり、相対立する二つの党派から支持された、競合し合う候補者であった事実は残る。

同様に、ソデリーニ失脚時のフランチェスコ・ヴェットーリの立場も微妙なものであった。彼自身はソデリーニ政権に対し是々非々の立場を貫いていたが、弟のパオロを始めその親近者たちは、反ソデリーニ派の代表者であった。事実ソデリーニに辞職を強制したのは弟のパオロ、そしてフランチェスコの女婿の弟アントンフランチェスコ・アルビッツイ、彼の義兄ジーノ・カッポーニそし

<sup>40</sup> この交代の経緯とその政治的背景については、そしてその後のマクシミリアン1世宮廷における両者の協劣については Roberto Ridolfi, *Vita di Niccolò Machiavelli (7 ed.)*, Sansoni, Firenze, 978, pp.159-160, pp.161-164. H. C. Butters, *Governors and Government in Early Sixteen Century Florence 1502-1519*, Clarendon Press, Oxford, 1985, pp.116-117, pp.124-126. Devonshire Jones, op.cit., p.15, pp.24-30. これらの記事の根本史料である F. Guicciardini, *Storie fiorentine*, Rizzoli, Milano, 1998, p.443 には「マクシミリアン宮廷派遣大使の職には、この職に自身が信を置く人物を据えようとしたソデリーニ政府主席の尽力により、マキアヴェッリが選出された。だが彼がこの差遣の命を受けるや否や、権門勢家に属する多くの人々が一斉に不平の声を上げ始めた。主席は他の人物を皇帝のもとに差遣した方がよい。フィレンツェにはこの差遣の任に堪えうる門閥の公達たちが数多くいるのだから、彼らが認容されるべきであると言うのである」。マキアヴェッリとヴェットーリの対照的な政治的立場が、この引用文からも窺われる。

てバルトロメオ・ヴァローリの4名に他ならない。生命の危機にさらされたソデリーニ主席がマキアヴェッリを仲介者に、最後に頼ったのは他ならぬフランチェスコ・ヴェットーリであった。フランチェスコのこの行動は、ソデリーニに代わって政権を握った親メディチ派の人々の不評を買った<sup>41</sup>。にもかかわらず、彼はメディチ家の総帥レオ10世からメディチ家の昵懇衆として受容され、その後直ちにフィレンツェ共和国のローマ聖座駐在大使の頭要にも補されている。つまり彼は新政権の奥の院を構成する一員でありながら、その一方で他の政権構成員達から絶えず不審の目を向けられかねない、弱みを抱えた存在であることを痛感しなければならなかっただろう。1513年から1515年に至るマキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡を理解するについても、当時のヴェットーリが置かれたこうした不安定な立場を考慮することは不可欠である。

## — V —

### 第三節においてルネサンス期の書簡を私的な日用書簡、公的書簡、人文主義

- 
- <sup>41</sup> 政権交代のヴェットーリの立場や言動については、Devonshire Jones, *op.cit.*, pp.61-65 を参照。デボンシャー・ジョーンズはこの箇所、叔父に反ソデリーニ主席派の総帥ベルナルド・ルチェッライをもち、弟パオロや親類のジーノ・カッポーニ、アントンフランチェスコ・アルビッツィらがこぞって、1512年のクーデターの首脳部を形成したのに対して、フランチェスコ・ヴェットーリが、比較的ソデリーニに対して穏和な態度をとった背景として、1507年の協労以来のマキアヴェッリとの強い絆を指摘している。
- <sup>42</sup> 政権発足当初、ソデリーニ前主席の亡命に協力したフランチェスコ・ヴェットーリは、反ソデリーニ派門閥集団から、獅子身中の虫の如く目されていたようである。Devonshire Jones, *op.cit.*, pp.64-72。彼が新政府内においてメディチ家の〈友人〉(amici)のうちに加えられ、重要な官職を保持し得たのは当初は専ら、彼の弟パオロの政権転覆に際しての活躍や、加えて父ピエロがロレンツォ豪華公時代以来、メディチ家の昵懇衆に数えられていたという外部的理由による(「このピエロ・ソデリーニを保護してやったという振る舞いのために、私はメディチ派からは不興を買い、他方反メディチ派からは感謝してもらえません。ですがそれはもういいのです。この振る舞いがこの都の安寧と、私が彼との間に有した友情を保つに十分でありさえすれば、それ以上何も言うことはありません」1513年4月9日マキアヴェッリ宛書簡)。政権内においてこうした不透明さを抱えた存在であったフランチェスコ・ヴェットーリが、小ロレンツォによるフィレンツェの君主国化の急先鋒に転じた内面的整合性は、マキアヴェッリにおける共和国と君主政の問題を再検討するにあたって、注目すべき素材となる(その間の経緯についてはR. Devonshire Jones, “Lorenzo de’Medici, Duca d’Urbino, “Signore” of Florence?”, Gilmore ed. *Studies on Machiavelli*, Sansoni, Florence, 1972 に詳しい)。

的な親交書簡の三形態に分類した。だが全ての書簡が、その三形態のそれぞれに整然と区分できるものではない。むしろその大半はこれらの幾つかを組み合わせた性格をもっている。例えば公的書簡はダンテの『神曲』「地獄篇」における、ピエル・デラ・ビーニャやブルネット・ラティーニに対する言及に窺えるとおり、13世紀以来イタリアにおいて既に高い威信を有する知的技能となっていたが、15世紀を通じてコルッチョ・サルターティ、レオナルド・ブルーニと、当代を代表する人文主義者が相次いでその内閣官房長に就任するに及び、人文主義的書簡としての性格を備えるようになっていった<sup>43</sup>。私的な日用書簡の場合でも書き手が人文主義者であれば、親交書簡的側面を濃厚に併せ持つこともあり得る。あるいはマキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡のいくつかがそうであったように、公的書簡を様式をあえて仮冒するような私的書簡がなかった訳でもない。

1513年から1515年に至るマキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡を、こうした現実を踏まえ重複をおそれず分類すれば、私的書簡に分類できるものが13通、人文主義的親交書簡に分類され得るものが7通、そして彼が内閣官房在職中に書き続けた公的書簡（使節書簡や行政書簡）に近い体裁をとるもの10通という結果が得られた。私的書簡を更に細かく分類すると、ヴェットーリに対する感謝や依頼を伝達する日用書簡が10通、他方艶笑劇仕立ての世間話を取り上げる娯楽的性格のものが3通である。同じ私的書簡でありながら、この日用書簡と娯楽書簡は様式的にはっきりと区別される。また公的書簡を模した書簡とその他の書簡の間にも明白な断層がある。執筆時期について言えば日用書簡や親交書簡はほぼ全時期に散在しているが、娯楽的書簡3通は1514年1月5日から2月25日に限定されており、また公的書簡を模倣したそのうち半数の5通は1513年4月29日からの時期に集中して発信され、各書簡の分量も通常の書簡の数倍に達する長大なものとなっている<sup>44</sup>。またこれらの往復書簡の間にマキア

<sup>43</sup> コルッチョ・サルターティに始まる、フィレンツェ政府内閣官房における人文主義的書記官長の伝統は、レオナルド・ブルーニを経てカルロ・マルズッピーニ、ポッジョ・ブラッチョリーニ、バルトロメオ・スカーラ、マルチェロ・アドリアーニへと継承された（ガレン前掲書参照）。

<sup>44</sup> 本書簡は、フランス王ルイ12世とスペイン王フェルディナンド2世の突如の休戦協定締結



ヴェッリはしばしば、甥ジョバンニ・ヴェルナッチ宛書簡を発送している。これは正にフィレンツェの一般市民の日用書簡の書きぶりを踏襲しており、ヴェットーリに宛てたそれとの差異を測る物差しとして有益であるが、本稿の主題と外れるので深くは取り上げない。

感謝・依頼を主題とする日用書簡 10 通もその中で、マキアヴェッリ自身に関わるもの 7 通と、彼の知人への便宜をヴェットーリに依頼するもの 5 通に大別される。後者の大半は知人ドナート・デル・コルノの公職選出への支援の依頼・謝礼であり、当時のフィレンツェにおける友人関係・庇護関係の作動メカニズムを知る良い手掛かりと考えられるが、これもまた人文主義的書簡技法を踏まえたマキアヴェッリの自己演出の考察という、本稿の根本課題からは外れた素材である。こうした手続きを経て、今回の考察の材料として掬い上げられたのが、1513 年 3 月 18 日付から 4 月 16 日付に至る、ヴェットーリ宛の 3 通の書簡である。これらは筆者の判断によれば実用的な日用書簡の性格と、人文主義的な親交書簡の性格を兼ね備えた書簡である。以下これら 3 通の書簡に、ヴェットーリ宛書簡群全体の導入とも言うべき、1513 年 3 月 13 日付書簡を加えた 4 通の書簡を分析していきたい。

#### ① 1513 年 3 月 13 日書簡

前政権の残党として、復権したメディチ政権により投獄された後、レオ 10 世（ジョバンニ・デ・メディチ）教皇即位の大赦により、バルジェッロ監獄から出所したことを知らせる手紙。【挨拶】として宛先であるヴェットーリの名を定式に即し記し→手紙の【導入】として出所の事実を報告し→「運はあらゆる手を尽くして私をいたぶった」が「私はもっと慎重になり」、「疑り深いご時世」も過ぎ去るであろうゆえ、「もうこんな目に遭うことはないでしょう」と【叙述】を行い（このあたりには人文主義的親交書簡特有の、単なる動静報告を超えた、人生観の述懐がかいまみられる）→手紙の本題として弟トット神父を新教皇の

---

に関する、ヴェットーリからの意見聴取がその執筆の契機となった。この休戦については F. Guicciardini, *Storia d'Italia*, Vol. II, Garzanti, Milano, 1988, pp.1222-1228 (Capitolo IX)において考察されている。

従者に任じてくれるよう仲介してくれないかと【請願】し→最後に【結句】として「ひょっとしたら聖下か聖下に近い誰かのもとで、私を何かの役に立てようとなさるのではないのでしょうか。そうなれば貴兄には名誉、私には有益なことにちがいません」と締めくくっている。これは基本的には通常の日用書簡に分類すべきものと判断するが、こうした構成からマキアヴェッリがこの書簡を、当時の人文主義的書簡の五段の構成法を踏まえて執筆していることが推測される。

〈運〉を個人の力量と時勢の転変を通じ克服するという、マキアヴェッリの主要著作にも窺われる人間観を自身に適用し、不運を耐え忍ぶ有徳の人物として、自身を印象づけようとしている点も目を引くが、それ以上に重要なのは、本書簡の真の主題である自身の就職依頼をあえて【結句】に移動させ、弟トットの昇進の仲介依頼を前面に押し出している点であろう。このようにしてマキアヴェッリは自身の就職問題につき些細な問題という印象を付与し、またそのために尽力することがヴェットーリにとり〈名誉〉をもたらすことであると示唆することにより、これが庇護関係に基づく従属者の庇護者に対する懇願ではなく、友人関係に基づく対等の取引であるという虚構を作り出している。

こうした虚構は依頼されたヴェットーリにとっても、この問題に関与することが義務ではなく、友人としての自発性に関わるものだと感じさせることにより、その負担感を軽減する役割をも果たしている。マキアヴェッリという現政権に対する政治犯の就職に尽力することが、高位高官にありながら現政権に対し負い目を持つヴェットーリにとり、心重い仕事であったことに関するマキアヴェッリの自覚は、出所に関する冒頭の謝礼の辞に際して、メディチ復権に大功のあった弟パオロの名を、宛先であるフランチェスコより先に挙げられていることから感知されよう。

## ② 1513年3月18日書簡

詳述は避けるが、この書簡においても人文主義書簡の五段構成は相応に守られている。また先の書簡には軽く触れられたに過ぎない、不運を耐え忍ぶ有徳の士という人文主義的な人間理想と自己の重ね合わせを深化させている点にお

いて、本書簡は前書簡に比し人文主義的親交書簡の典型にいつそう近づいたものとなっている。

この書簡の記述において察知されるのは、前便において虚構されたマキアヴェッリーヴェットーリ間の関係の対等性が、既にこの書簡において崩れ始めている点であろう。「貴兄のお役に立てる仕事につけるよう神に祈っています。そうなればありがたいことです」、あるいは「私を使って良かったと思っていただけるような働きを必ずやして見せます」という文言から窺われるように、マキアヴェッリーの登用は、ヴェットーリに確実に〈名譽〉を授けるものとは表象されなくなっている。仕事の提供は両者間の取引ではなく、ヴェットーリの側からマキアヴェッリーに授けられる恩恵としての色合いを濃くしている。

こうした転換の背景には、前便に対するヴェットーリの返信が本書簡冒頭にあるように、如何に「愛情溢れる」ものでありまた「過ぎた苦しみを忘れさせる」ものであったとしても、そこに具体的な提案が何一つ無いものであったことがあろう。繰り返しとなるが、如何に高位かつ教皇に昵懇の地位に在ろうと、政権移行時の経緯から、フランチェスコ・ヴェットーリのメディチ新政権内における地位は、前政権の懐刀と目された人物を推挙し得るほど、決して盤石なものではなかった。「私がこうして生きていられるのも、偉大なジュリアーノ・デ・メディチ殿と貴弟のパオロのおかげ」とのみあり、宛先人であるにもかかわらずフランチェスコ・ヴェットーリの名が挙げられてはいない。

かかる状況のなか一週間前には自信満々であった自身の就職の吉左右につき、マキアヴェッリーが次第に自信を失い始めていることは、「私などもう不要というのなら、この世に生を受けたときのままに生きるだけです。私は貧しく生まれ、楽しむより先に苦勞することを覚えましたから」という、諦念の言葉からもこれを窺い知ることができよう。前便に描き出された不運に耐える有徳の士という自画像はいつそう強化され、「どんな運命にも少しも変わらない気迫と威厳を備え」るべく（『ディスコルスィ』第3巻31章）、己の生の芯を探り当てようと苦闘する思想家マキアヴェッリーの誕生がここに告知されている<sup>45</sup>。

<sup>45</sup> こうした逆境を泰然と耐え忍ぶ有徳の士の典型として、古代ローマの執政官のうちでもルキウス・クィンクティウス・キンキナトゥスやマルクス・フリウス・カミルスは市民的人文主

「(レオ 10 世即位に伴う) 街をあげてのお祭り騒ぎの中、ぶらぶらと過ごし、残された人生を楽しんでいます。まるで夢を見ているようです」。この書簡のこの結句に絶望や痛憤すら枯れ果てた後、現世を越えた長い歴史的視野へと飛び立とうとする彼の脱皮を見て取るのは、穿ちすぎた感想であろうか。

### ③ 1513 年 4 月 9 日書簡

この書簡もまた五段構成に則ったものであるが、その【導入】冒頭のダンテの詩句の引用に、マキアヴェッリに便宜を図ることについての、ヴェットーリの〈怯え〉を明瞭に見て取ることができる<sup>46</sup>。彼の〈怯え〉を前にマキアヴェッリは、にもかかわらずヴェットーリからなお好意を引き出すべく、後者の心理を操作すべくいっそう精妙な言葉の綾を織り成していくことになる。

マキアヴェッリはまず、自身の請願によりヴェットーリを〈怯え〉させたことを、「自分のためにではなく、貴兄のために残念に思」うと詫びを入れ、「私が苛々しているとお考えだなんて、心外です」と釈明する。こうしたヴェットーリの心のささくれに、彼は「拷問の吊し縄よりもぎよっとさせられ」たのだとすら述べている<sup>47</sup>。そしてこれを承け「私は何事も切には望まない心構えができています」と、後者の負担感を軽減するよう努めている。

巧妙なのはこうした弁明を、表見的には聖職界の事案なるがゆえにヴェットーリにとっても比較的手がけやすい、弟トット神父の昇進問題として語りながらその実、彼自身の就職問題を本題として行っている点である。「私がお願いすることは何であれ、わざわざ気にしていただくほどのことではないのです。無理な場合でも、私自身少しも気にしません」と全てを断念するよう見せかけ、督促に苛立つヴェットーリ的心情を宥めている。「そのことならもういいのです。転がせないのなら転がせておけ、です」という諺の引用によって、不運に耐え

---

義者の崇拜の的となり、ティエポロの「キンキナトゥスの独裁官就任」やヴァザーリの「カミルスの凱旋」など彼らを素材とした数多くの絵画や詩文が作られた。

<sup>46</sup> 「その色に気づいた私は、こう言った／あなたが怯えておいでなら、どうして私に行きましょう／私がつめらうたびに励まして下さるあなたですのに」(ダンテ『神曲』「地獄篇」第 4 歌 16-18 行)。

<sup>47</sup> 直近の投獄時の悲惨な体験がこうした比喩表現の枕とされていることは言うまでもない。

る有徳の士という自己イメージの演出に、彼は再び立ち戻っている<sup>48</sup>。

だがそれは偽装に過ぎない。続く【叙述】部において、「私には、じっと黙っているか、政治の話をするか、二つに一つなのです」という名高い一句を序詞に、「私もそちらに行って教皇にお目通りしたいものです」と、なおも就職についての期待を捨てきれないことを、彼は暗示する。この期待を前提とした【請願】部こそ、この4月9日書簡の核心に他ならない。ここにおいて旧友ソデリーニ枢機卿による教皇への仲介活動に言及しつつマキアヴェッリは、ヴェットーリからこの推挙活動を督促すべく「枢機卿に口利きして」もらいたいと、実は強引に談じ込んでいるのである<sup>49</sup>。

筆者が感嘆されたのは【結句】部である。いったん露骨な就職活動を繰り広げ、庇護者としてのヴェットーリの顔を顰めさせたと見るや、この【結句】部において彼は、彼がヴェットーリに以前に貸与した馬の件や、彼と不仲だったフィレンツェ大司教の死につき軽い戯れ口を飛ばすことにより、友人間の和やかな親交の雰囲気を再度導き入れ、書簡全体を締めくくっている。このような心理操作の粹のような書簡を前にしては、マキアヴェッリの執拗さに一瞬心を荒立てたヴェットーリも、微笑させざるを得なかったのではないだろうか。

#### ④ 1513年4月16日書簡

前便からちょうど一週間後に執筆されたこの書簡は、一見これまでの就職問題を主題とするいささか生臭い書簡よりむしろ、1514年の1月から2月にかけて執筆された、後年の彼の喜劇を彷彿とする世間話仕立ての3通の書簡に類似したものである。それは恐らく前便末尾の、意図的にしつらえられた喜劇的雰囲気を引きずってのことだろう。だがこうした喜劇的雰囲気は、「とはいえ時には笑い歌いもする／それだけが我が嘆き悲しみを／ぶちまける唯一の道なのだ」

<sup>48</sup> こうしたくだけた諺や格言の効果的引用も、人文主義的親交書簡の技法的特色の一つである(Najemy, op.cit., p.33.)。

<sup>49</sup> この部分は表見的には、就職活動の促進のためマキアヴェッリ自身から枢機卿に請願を行うか、ヴェットーリを介してそうするか、あるいはどちらも断念すべきか、三者択一の問いとしてヴェットーリの見解を質す形をとっているが、実際にはヴェットーリの尽力を期待していることは明らかである。

という、あたかもマキアヴェッリが己の忍辱の情を仮託したかのような、ペトラルカの詩句の引用を境に一変する<sup>50</sup>。

「ジュリアーノ殿下がそちらへ行かれる予定ですから、私のためにお骨折りいただける機会が見つかるはずです。ヴォルテッラの枢機卿からもお口添えいただけるでしょう。うまく事が運べば私に何らかの仕事が見つからない訳はないと思えます...それにもし教皇聖下が採用して下さるなら、私が友人全員の便宜と名誉を顧みず自分のためだけに働くなどということはありません」。もはや不運に耐える有徳の士を装うゆとりすら失い、なりふり構わず仲介を懇願するマキアヴェッリの焦燥が伝わるかのようなくだりである。

もともと彼もこうした自身の卑屈さに耐え難くなったものか、この直後「このように書きますのは、なにも度の過ぎたお願いをしようとか、温情につけ込んで迷惑や出費や何らかの苦難を貴兄に押しつけようと思うからではなく...私の益は常に貴兄とご家族の益でもあることをおわかり下さればたすかります」と言を補い、ヴェットーリとの関係の均衡を取り戻そうと努力している。だがこの書簡の前半の喜劇仕立ての物語は、実はもはやマキアヴェッリとヴェットーリの友人関係が、俗世の利害を超脱した洒脱さの世界でしか、成立しなくなっていることを示唆しているのではないだろうか。我が国中世の〈御伽衆〉にも似て、ヴェットーリという権勢家の私的遊興の幫間として振る舞うことを通じてのみ、マキアヴェッリの彼の友人たり続けることができたようにも感じられる<sup>51</sup>。

## — VI —

結局かかる苦渋をかみしめつつマキアヴェッリは、その求職戦略を大転換させる。即ちこれまでのようにヴェットーリに対し、就職斡旋を徒に懇願し続けるのではなく、自身の国際政治の分析者としての力量を誇示し、その実力の評

<sup>50</sup> ペトラルカ『カンツォニエーレ』第102歌12-14行。

<sup>51</sup> 享楽的内容に彩られる1514年1月5日から2月25日にかけての書簡3通には、マキアヴェッリのヴェットーリに対する、こうした幫間的立場が如実に表れているように思われる。

価により職を得ようと決心したものの如くである<sup>52</sup>。半ば国際関係の分析論文と称しても過言ではない、5通の連続した長文の書簡（1513年4月29日-1513年8月26日）はこうして執筆された。そしてこうした試みの延長上に出現したのが、かの有名な1513年12月10日の書簡にその誕生が告げられる『君主論』に他ならなかった。マキアヴェッリはこの手紙がローマのメディチ政権中枢の人々に回覧され、高い評価を博することを期待したに違いない。4月29日にこれまでにはない長大な書簡を書き上げ、ヴェットーリに送りつけたことから彼の意気込みを窺い知れよう。それどころか彼はこの書簡中に、ヴェットーリの懇懇を契機にかかる考察に取り組む充実感を、「読み返すたびに不遇を託つ身であることを忘れ、あの権謀術数の世界に戻った気がします」との言とともに述懐している。だがこうした活動がマキアヴェッリの就職活動に役立つと、ヴェットーリは本当に信じていたのだろうか。筆者には些か疑わしく感じられる。むしろ執拗に就職斡旋を依頼するマキアヴェッリに困惑し、彼の気持ちを逸らすためこうした撒き餌をちらつかせたというのが本当のところではないか。事実4月29日付のマキアヴェッリの長大な書簡に対しヴェットーリは、6月20日前者が痺れを切らし、再度長大な書簡を送付するまで返事を書くことすらしていない。それどころかこうした政治的考察の集大成として前者が脱稿した『君主論』についてすら、12月10日書簡におけるその誕生の告知後も、はかばかしい反応を示してはいない。

恐らくこうした経緯を通じマキアヴェッリは、ヴェットーリが彼のためにどんな斡旋をすることもできないことを自覚するようになったのではないだろうか。もちろんヴェットーリとて、その友人あるいは庇護者としてマキアヴェッリのためできることはやっていることも確かだ。この間の様々な書簡の中に散見されるようにマキアヴェッリの請願に応え、その友人ドナート・ディ・コロノがその社会身分的制約を乗り越え、政府の名誉職に就任することを首尾良く実現している<sup>53</sup>。だが当初の彼自身の楽観的予測にもかかわらず、マキアヴェッ

---

<sup>52</sup> こうした転換のきっかけが、ヴェットーリによる懇懇を契機とするものであったとすれば、この点転換自体ヴェットーリの提案によるものであったのかも知れない。

<sup>53</sup> もちろんこうした斡旋は、コロノ側からのヴェットーリに対する資金提供を期待してのこと

リの就職にヴェットーリが関与することには、今日となつてはその実態を解明することが些か困難な、絶対的な壁が存在していたようである。その中でマキアヴェッリは自身の心情を、より深い諦念と共に鍛え上げなければならなかった。1514年1月5日から2月25日にかけて彼が送付した喜劇の書簡3通もそうであるし、ヴェットーリのその向こうを張るように綴られた自身の恋愛譚もそうであるが、この間の幾度にも亘る書簡の往復の果てにマキアヴェッリは、ヴェットーリの浮き世の外の遊興の〈連れ合い〉として、彼と自身の対等性を確認することにより、自分自身の精神的矜持を演出することを企てたように思われてならない。

ヴェットーリとマキアヴェッリの交流は敵と味方（失職以前）、対等な友情関係と不均衡な庇護関係（失職以後）の境界線上に繰り広げられる、非常にデリケートなものであったと考えられる。特に1513年以後、公的地位を剥奪され経済的にも困窮したマキアヴェッリと、その家系に基づく生来の政治的・経済的威信に加え政権中枢に参入したヴェットーリとの社会的格差は歴然たるものであった。

にもかかわらず両者の関係を成立させていたのが、マクシミリアン1世宮廷での協業以来の、後者の前者の才能に対する尊敬の念であることは間違いない。それゆえマキアヴェッリがヴェットーリとの交際において必要としたのは、この才能を媒介とした平等なる友情関係という衣を、ヴェットーリが許容し更にいえば必要とするときには、両者の関係の上に差し掛けつつ、他方ヴェットーリが自身の社会的優位性に立ち戻る必要が生じる際には、ヴェットーリ自身より一呼吸早くそれを察知し、その優越性を受け入れ、自らを劣等者の地位に立たしめる、いわば上位者の意を忖度する才能であった。

こうした忖度の才能を通じてマキアヴェッリは、ヴェットーリとの往復書簡を通じて、その才能のみを抛り所に、身分的差異を超えて貴人と〈友情〉をはぐくむ、平民出身の知的エリートに求められる出处進退の理想的あり方を、深

---

でもあるが（1514年12月20日書簡）、この請願の実現によりマキアヴェッリ自身もコルノからなながしかの謝礼を手に入れたはずである。



く己のものとしていったのである<sup>54</sup>。貴人に対するこうした自己演出は単にマキアヴェッリのみならず、新たに出現しつつあった宮廷という場において、血統やそれに伴う政治的・経済的威信さらには時に文化的威信さえ身にまとい始めた伝統的支配層と邂逅し、これに対する奉仕あるいはこれと共に協業することを必要とした、〈知の傭兵〉としての人文主義者全般が追求した処世術に他ならなかったのである。

(金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系)

---

<sup>54</sup> トレックスラーは「書簡における修辭的要素」の駆使を以て、立場や社会的地位、富といったものを「儀礼的情動」を媒介に「架橋しようとする試み」ととらえ、それが社会維持の基盤となったことを重視している。Trexler, *op.cit.*, pp.132-136. Najemy, *op.cit.*, p.22.

\* 本稿の執筆に当たっては科学研究費・基盤研究(C)「知の技法としての人文主義書簡と近代教養市民の自己形成」及び同じく基盤研究(C)「マキアヴェッリとフィレンツェの政治文化—社会形成に〈神〉は必要か」から多大な支援を受けた。末尾に記して関係各位への謝意に代えたい。